



# Salvator Mvndi

<https://hdl.handle.net/1874/406862>

260. x

Agua

所

所

登りてんーやのけうろめんとしを  
ちずもまさばかきてんけいよまのや  
とまふ科まあまふとすいりけい  
らうやくし

登りてんーやのけいよまふ  
こよまのまけいよあんちりさん  
中のこうくうしよこんいさん  
とよまてんけいふゆい

In nomine Dei.

Codicem hunc Sinensem  
impresum

Florentissima Bibliotheca Publicae

ULTRAIECTINAE

ex sua

atque sui affectus erga hanc  
Academiam

Memoria

ria

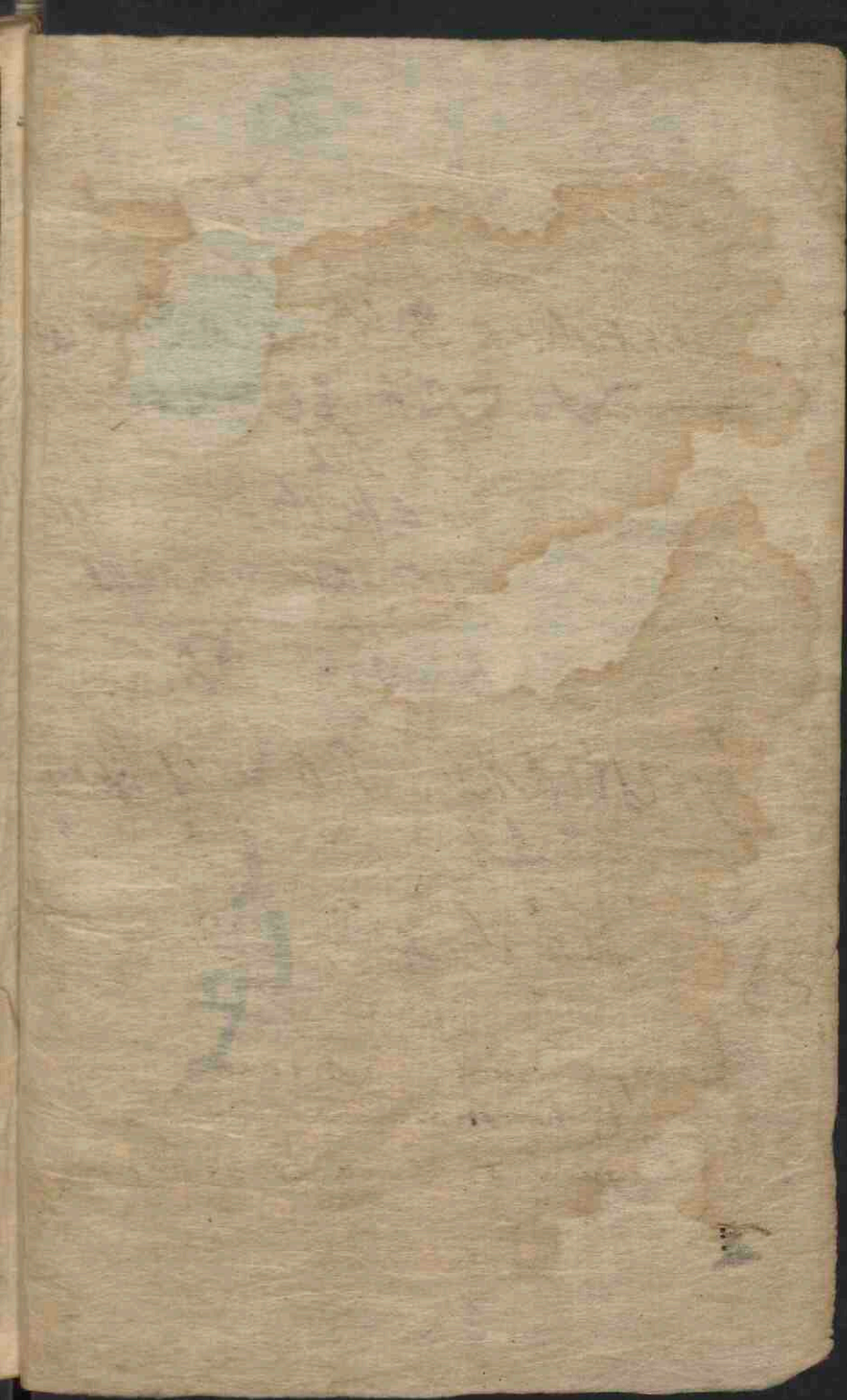
L. M. G. V. D. D.

Christianus Ravius Berli-  
nas.

15<sup>o</sup> Jan. 1644.

Compendium doctrinae  
Christianae

linguae et caractere Japonico.



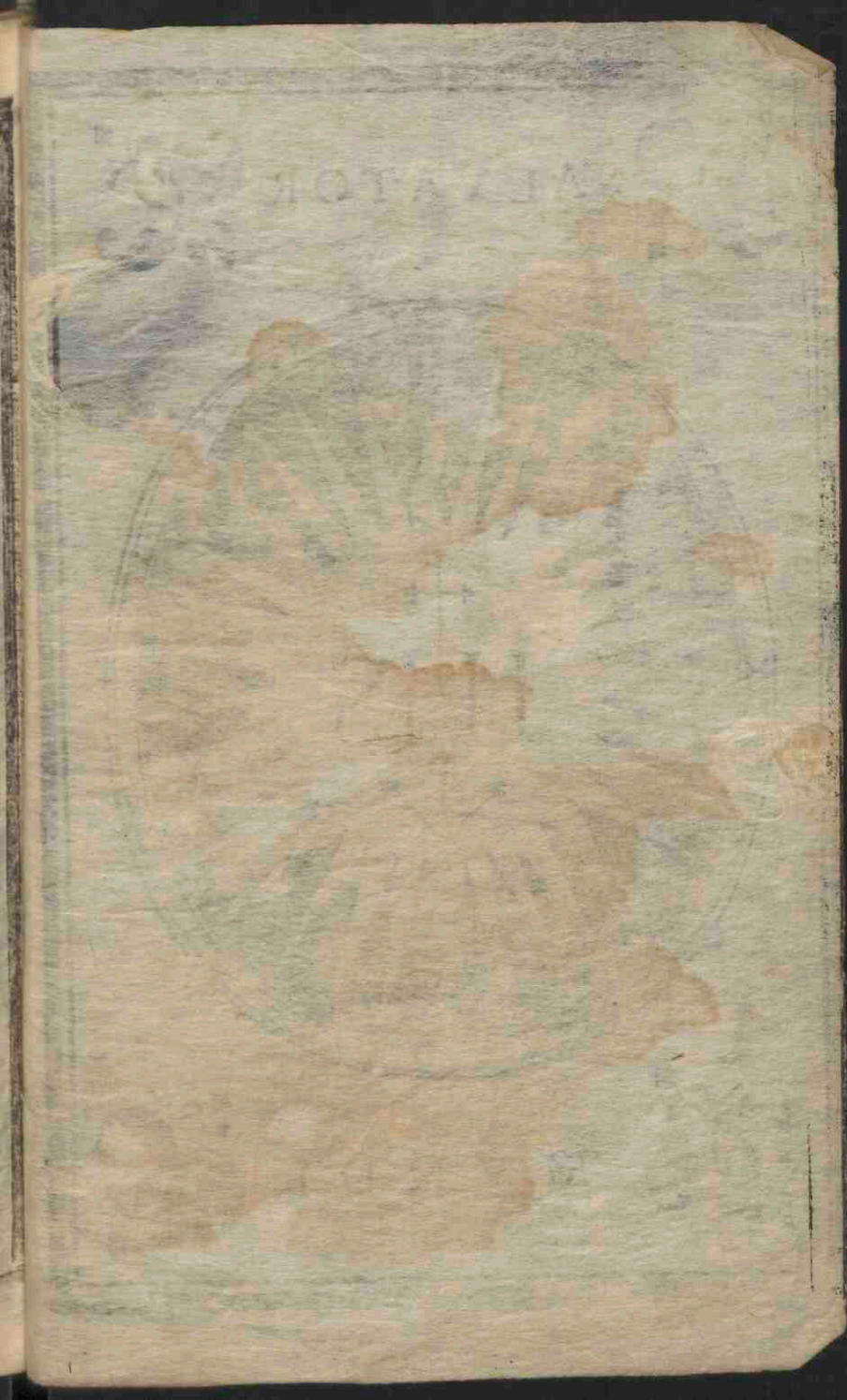


SALVATOR



MUNDI





○あんにいさんまよんパーラうと

又吾徳は日ましくほごいれよ

まーのほり

ひそらの酒まきまよんあんぼちかうせま  
たんぬ生ののあんらくまゆふあまらま  
つのはかかんようしを良あちかうせま  
たーうまよんあまらうじほりあけまよん  
わんまよんあまらうじつのだまよんあま  
くまーのわげうぢんまらうぢらほりあま  
まらうのほまあまーてまらうのあま



二をかくさばやうはやうぢやうのゑま  
あゝはあぢいさごとく一坪のあくのあま  
あまを科の病あまをくはまあま  
たのま二のぢぢぢ一はあんのいけんま  
ぞあまはけいあまらあまはあまらぢぢぢ  
ますてあま科を二をあまあまあま  
あまんくういんまよくまくあまあま  
あまい二つまあまあまあま

○第一こんいさん乃あまのぢ

下うあまあてあまあまあまあまあま

人君の所はたこゝとてとせめ多ふよよして一切  
人君のせんあくよはさうのいふをわらう  
をちりしつよをこひのふは位をあらへるふ  
あま又は手せざとてまゝといひ位をあらへる  
たうてはよは下は家もも位とて人君の  
科なきだこゝあまうあられをせしよ  
たひあま科をくまよははるきよよとの  
ゆゑ或可也でーたちはいふゆへーの力を  
のさへぬいて富しくゆふはいひはさんとな  
うけよ又人君の科なきをせよたは

べーねくをゆふ世界はよいいてほぶのたろん  
りまの城一を天はよいいてよーとととととと  
可あおとをよよてこんいさくのこちを定め  
ぬいあんへそふら又たこーてのやくと  
あて科まゆほぶふこふまふらこくふふふ  
所まをいけを定めふまよて城まよあとしよ  
はくまころのほまよ下所まよあじ〇二つよ  
城ま科のたこーてとあふふふんへまふら  
初も同まの人るまを科まあふふふら  
こやはらふべーとととととととととととと

あてのいぬをあんいさんよP19のよかこ  
かぶささる90二つは細う科よこんい  
らんよあらんはよそにあいさういけんよ  
うけみちいりき大物のたをうまよのらぶ  
やうよあへらほささる90二つはいこんい  
さんのらんめんとよきめあさる9たとい  
を人る科よあほまどきだめよくはわの  
いしよあ科よあうてきこんいさんよ  
P19はあまどきとあもらさよかーお  
あよ科よあさる90二つはあさるい

さんどののうさ残らうあはぬは来るものよと  
あまいけうめんとよとてとのへあふり  
そじきあひよくあひさんま尸位ごとよ  
でうはあひのがうあまあへあふり  
さたまあふあひそあひといふいとあひ  
けうめんとよこのあひあま一は科は  
けうめらあはぬあひあひよくあひり  
よらあふり科あひてう一あひらあふり  
とでうあひのあひあひ二あひあひあひ  
あひあひあひといふあひあひあひあひ

ひさんまよく寝きよまいてんげん—うんかと  
の科まあとくくでうま教—うん何く  
かままも下らばいじ—もふうろ新あま  
くづはうまをうままPちをままはゆま—  
まも下されの寝さうおろろがうまのまはうこ  
ままがうままくはうまあままゆへんはま  
おまのま—おまこたうんかとてこんへそ  
ままのまのままはうまのまのま—まも下ま  
まのま—まのまのま—まのまのま  
まのまのまの科ま教まふまのま—まのま

辨によて来世はうくぐもあのくはーこよ  
じ世男よよいてそきよめいほるるをよてん  
あよあうらばよよてなまふこゆりだー  
じ世男よてのをよてんあやねまよてうく  
ぐまくわーこのがばよめいほるるをよ  
よいてのまがそくあはちよあうだうのまよ  
よてうくぐまじあよこんいさんあしたと  
へぞちやくまふいーやうらよこぬく物あな  
によてふくわくあごどくいげんこまふよ  
いまよゆこんへそふまーあーちらふあふ

いふやうにあらばくさくせんよまへにまへむしり  
 したるやまをいんけんよまへにたてなむ  
 あよ海のけいせいよまへにまへむしりよまへむ  
 りやのいんけんよまへの出入あらむせよまへにまへ  
 りうぢりよまへにあらむせよまへにかあらむせよまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ  
 りよまへのけいせいよまへのまへむしりよまへのまへ

○弟子のいんけんよまへのまへむしりよまへのまへ



たもはげき

あんいさんまよそくあはりのあくパーせんか  
おもてあはれうんはたまたもはげきパー  
さんいさんまパーあまよそのかくごの  
いもよきパーあはれんとあれごさんひ  
さんとあはれパーあまの科まおもひいパー  
そじさたてまよきパーあはれあまよ  
あはれまよひまはあはれあまよあまよ  
あまよまよまよかんとあはれあまよあまよ  
あまよまよまよあまよあまよあまよあまよ

をんまは若そのかんどちやうまどげん  
とまはぬば我いあのかよまてさんようま  
まらあとい二はかくのごとくかくま  
おさん何れせ一科まあまたやましくおもひ  
おさん為よい此の身こつ幸まはらうま  
よまらきくう一てま一ヶ条げまよま  
らう一たまやいあやまあ人まべ一又この  
たよまとあはらうらま一あんひさんま  
あのうまよくま一月日のねとま  
とまのはらひくら 註同すまあて一あわひ

海にさるるもまたちよよかたのちよよ  
しりあはれさるるの夜よよくあはれんを  
じてかくとあいのよよあはれよよあはれ  
はまはれつくとあはれよよあはれよよ  
はのうらやまよよあはれの科よあはれ  
まよよかかくあはれのよよあはれよよ  
人あはれよよあはれよよあはれよよ  
あはれよよあはれよよあはれよよあはれ  
あはれよよあはれよよあはれよよあはれ  
あはれよよあはれよよあはれよよあはれ  
あはれよよあはれよよあはれよよあはれ

よちぶやくひつりあ—じ—の—の—  
く—あく—ん—を—ま—人の—教—を—  
こ—か—を—お—て—ま—人の—ま—は—な—り—  
れ—も—い—ま—じ—も—の—か—の—こ—と—く—  
は—い—ま—い—ま—あ—く—の—ま—は—な—り—  
そ—も—い—ま—い—ま—の—ま—は—な—り—  
た—め—は—な—い—科—を—あ—り—く—  
れ—何—う—科—を—も—ら—ぬ—と—も—  
じ——  
あ—く—又—科—を—も—ら—ぬ—と—も—

めいよるおのりおぼたむかひーまんーの  
ぢやしりきをいけうくらのほちめあま  
たーうあうんじやよあんにんまよp  
およほきのほおひよぬえじうてかくの  
ごとくp  
おでうはよてまーぬはぬあまそし  
なまぬこのほを種まうーうろりまは  
あんでこうくははぬぬことよはぬぬ  
そしなまうんよあうらうあまうんぬ  
よいぬのまうんぬあまぬーぬ

我科は阿いあさうかしのうくくにあき  
しりよあけうくあらも物をあ力のあ  
もしよんは割しあひあままであし  
さう科のあ教しああさへあへ又くさ  
あの下あへさかうああて二あ科はあ  
あしきとかかくあしああしと

あまあをあまあはあとのあまあこんへあ  
あまあせああああああああああああ  
あまあああああああああああああ  
あまあああああああああああああ

ドベ—をきこよまかくてあつらふの科を  
のこぎどあうら—まはれ教—よこひをゆん  
地あて一つこよいくをちちらんとまよりのまても  
ドベ—も—ま教またあつらよおがえどふ  
よまあていおよをいくこびかごくドベ—たと  
へを他の物まぬきこころのりすをあらん  
細ぬきこまあらうのりすをあらしとゆうよ  
ドベ—まあうらゆんま教まあらまおよそ  
すをよこま及ぶまやいあやと里たこ細  
ぬきこまおせ—のりすをあらくすを

よまを及をんつとPーあよまいてつもの  
心切あまいうまももほらる科まてもあま  
まはりーさうたうまはうひうまかくはるり  
まぶらうずまあひこんへそほこんひさんま  
あまあまのまはるまとのまらあ代あまを  
あんへそほよ科まかくはることらさよまぜす  
ままーとまたをのまをらんとすほよ  
あまあうずままはるあちあままままよと  
いひてままよまもま科まあよこんひさんま  
つのもまらる科まかくはよまをていそまま



ゆめとーてそおの科まのぶーゆいど  
かへつてまかくーさうさあさーきと  
科とぬりあま科ま科まかまぶああま  
ゆめにかくのごとく科まかくーさうさ  
まよーまこんひゆんまはうさまじんま  
まゆゆんまごのこんひさんまあまわくと  
ぬいあままてあんひさんま人科まかく  
さんまゆいさまゆいさあまゆいさまゆい  
ひ科まかくまいひまゆいさあまゆいさ  
かーまゆいさのたぐあまゆいさまゆいさ

へきだめよ一つの心切あり程長きことんひ  
さんの内よつきのよりを徒は阿らふよ  
よみかたであーたといひのちまうーあ  
ことあると三光一つのべよあ俗科まものう  
ふらふり叶いませ

あよいよんを分よま掛けぬらんよてん  
あやよちえれさあやうよまやくはとめん  
より解あしことせいのあはれはあうせ  
あさげけのあよんあごのあよあうあよ  
らあひるあさるんあはれあのあはれあす

へーそまのそ他めいけはまおてら日よも  
けあくの七日ごとよぬたぬきさつりともい  
ぬべしとまぬらんいさんのへまらんさや  
まゆぶんよよてさつりつやとじけとさ  
ぬ科よめいけらわとのるまてらんきよ  
あふぎんらあふたうりまよいよひてま  
あそくそふあまああかくけーまよてかう  
まぶさしりまけまをげんまよてま  
トげんぬた科まくりまよまゆさゆめ  
あがうい換けらぬ一屋まてんあやのあ

西條のついでして町にありとまゝにあらんぞ

六よらうかますちあまうけな人あうら

こんいさんててよまくと花も又掃りまを

づまやいあまこんへそはよとひいらの掃り

づまよまわていたのいゆまあまづーまのま

掃りまうらんくまきあまはまくらむ

くらあくあなのよ申可あまのまもの

合物まだづーもーゆぶんう又いほるる

よてまのま物まのま合ーるにまわていま

日あうかますちあまうけなまづーま

それはいれ受けよらでうすのは、愛の残ぶら  
あさぜむくまるといふ——まのほき教ひま  
して あはらうまちのほき、残はよふまはら  
まいとてあらうううあまほらでうすの  
あじうひは出なると、黒いとほら——さて  
あはらうのあまのほき、得たまをう  
かます、ちやまさげは、人のほきいふさ  
あま、くちびらままで、あらううけ  
あま、てよまのほき、かじうりま、あま  
かくはらうりま、あまのほき、うらまひ

たりの里よすのこ入べーかくのごとくかうろ  
めんとよす操りなすてしりまをやくかへりー  
うりんとよすあはぬよやくぶーをりまうりま  
かこよかりーめなほるれそまをせめて  
ふす何のるよけまーやまかーこほりま  
まいのちよよまお色ー科のほぬー  
あのか科よちちさるものかろま又い我  
あまゆめーもんけんをく科よちちま  
さいあまのうほやういとほまんでこい  
まふべーまないらま何はまゆりあはぬよ

まーいぬさむめりそむうまそいこーあー  
町へぬいんとがーとーいひきまふりや  
よりこびきふもー又まぶあうかまは  
ちあまうけきまふりやまくとをなめ  
あうまこんをそまよまねまぶき振作ま  
くーくただねまうあな

牙三あんーあんなやまたまを  
まーゆふり

あんいさんのためあうーう科ま黒い出  
さんとのをぬままぶこーこんひあん

よるまの年月をかんとへをきくま  
たはつうのゆゑをよむじりーとー種と  
よむじりりあはよまわてらんよよぬせーけを  
つよはよまよめすまざーあんにいさんいま  
かむうのりりあせーやいあやとあかん  
まーあーとまよとあがきをまよよいけい  
いくたびあまーをとあかんーかくの  
ごとく一ヶをばよまよめあかんーて  
まよはあさあけりりあらんーにぬぎをれま  
うにたまよあうせー科まのこすあらん



さずーて町のちかごとくおさる科をP  
 りり或は他人の科をPりりかしてあはべ  
 かゝず只我り科ーうろりり計まるの候に  
 Pべー又あはよあて一の心切所也也たよ  
 ちよほはままぶめんとすに算ての系を以ては  
 うろ科は形をべよのちもささしまをいば  
 道のまぶめんとよぬ穴そしく時をそむき  
 やうからくべよのほとぬまおもくいらもあ  
 うろとぬしたとへをぬをんめのまぶめん  
 とよ何てまらまつぬはまぶめくあひぬらう

やとちよいのういふべしおまをかくのごとく  
あふはくへーままままままままままままま  
ちやくー又一まままままままままままま  
ままままままままままままままままま  
かんつまへーうはくまへまへまへまへまへ  
せまんのぬふのんとはねまままままままま  
とままままままままままままままままま  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
たー十又目二十目とままままままままま  
まわていもかまら科也他ままままままま

まぶあんととのり

才一 清一作のてうをを殺ひきひきすべし  
才二 まさき清一はあはかけてむのーきちうひ  
とむべつらむぞ

才三 まぶあんととのり日をはとめぬをむべし

才四 油の父母はかうくむべし

才五 人をあむむべつらむぞ

才六 あやいんをあむむべつらむぞ

才七 ちうりこつらむべつらむぞ

才八 人よざんげんをかぐべつらむぞ

才九 俺のつままこいさへつらうず

才十 俺のまよふづまよのをもじへつらうず

才い まよふづんととの地のこけ糸よ

付てたもまげさう

才一 せんへのぬぶめんと

一 せんまーさんよあまてしうまかえかとけさ

あうまうらやいあやとたーあうまうらよ

まおていにくなとまねまをーまよの

糸よまもかくのごとくあふべー

二 かまかとけのをちまおそまうらう

あや又人君よをちりまむむうなるはり  
町へいと思ひいへる也

とせんちよのきはぬうせ月まちは  
ぬちよーやんきたうのためよみかかん  
やうとーまぎーなとよよいへるうり  
る也

あだといへんやんはるまぎーとんよすてど  
とてやんよまぎーとんぬえまよあ  
やとあやとらん何ことなまてちん  
あやまぎーとんよあやとあやと



七ひでまの条を何とぬか伝せざらん

何とぞ

ハニヤロー人のあつらふ事

又まゝへの内の何事の註目よてもあ

きうらうらうく黒いころり

九そらちうりかあひあうら

そらちうり又あうら

そらちうりあんじよんよ

まいてらあひいあうらよ

ロー

十カゴはあつりさあんな出来し或らよ  
まつたはあつりあつりてうはあつり  
まのあつりあつりあつりあつり  
もあつりあつりあつりあつり

あつりのあつりあつり

しせんちよあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつり



もんのお目録のことばはまじつていともなう  
科はあつておきだ 所おのきさつともなく  
級いあつてまじつていよあな科とあつて  
又か括のさいもんは終にローマはあつて  
あつてのふつてまじつていよあつて  
ローマはあつてまじつていよあつて  
さいもんはあつてまじつていよあつて  
いよあつてまじつていよあつて  
よあつてまじつていよあつて  
あつてまじつていよあつて  
まじつていよあつて

うらやまをさへしつゝうのぢもんをとげ  
たましむまなをかくのどとくのせい  
もんがばはるゆはあうどびーてま  
どくはるゆはあうど

あまのうらやまをさへしつゝうのぢもんをとげ  
たましむまなをかくのどとくのせい  
もんがばはるゆはあうどびーてま  
どくはるゆはあうど

あまのうらやまをさへしつゝうのぢもんをとげ  
たましむまなをかくのどとくのせい  
もんがばはるゆはあうどびーてま  
どくはるゆはあうど



三并は一能定里方あんいさん或い  
あてうまはよのをんであんへそぼよ  
あーありうあんいさんよPさこわー  
あまやまをたといあてうさるあ  
うんへそぼよ合あむのあんちりさん計  
よこもむし

あまはりトトあまよむまよせむゆんま  
あてのあまよあくーてあまよまらう  
あまや

あまあいのこほ七条の

まぶさの人とていふ

才のまぶさの人と

一文字母は濁りもあがりくうくもあつ又ま  
あとだうさけるんもあがりカをそへてま  
やうあつ

二まといはまをまぶさはさびーくわつ

かんー女のまよる科はあがりさけるりよ

まぶさの時はいまーやあつ

こ子をおふものゝまぶさーこんよあつ

順勇のまぶさあつ科はさへあつりあつ

いさめ申よせにやくぼう　まきののちよ  
あけほるうらあうをさつうんまくらあんま  
まみた又父でのこの科よおちざあやうは  
せいよ入づまううあまをそまの液よゆほうせ  
あまやあままたるるべー

いせんちよのひくらをちる入あーて  
けあよめーつうあまあをそまーとんよ  
あほべま様よいけんまくらるるうりああ  
あまをひ液よゆぶんあまあひまーとんよ  
あまといへんまをてままーとんよあまんと

花かきりかしてさへうさ何ま下人さかき  
たんあうをほちてのじゆまたもつ様  
いけよあーとまいあくとたさかべー

こんいさん平人知物ま持人を進退  
花かきあうをいいうへは又たの糸を  
あかんさかべー

あまやうあいの若女ま對して帳を約ひ  
うらりみや

六わり進退花かきあうの肉はるりさかき  
出来ーうらり時花かきあうさかき

らくちやくくーうらりりり

セリツウアいの若衆はカは及をぬくら

くまのけそねよべいせんまぐんぞうよるて

出させいろりりあま

ハもけろ科よあふりりまえけろりり

あま

九ありまへまらきの科あくしてわり進退

まゆまところまてろりり或いと科まことあ

里やいあやまどどてせいをいーろりり

あま



十一 今をせいをい良なる可いありうふんい  
せんよハオカヒスル一りありあつ又  
若せんちよふらよ可いありうころふ  
せんよふり一だんよふらふり一り  
あり

十一 科あり若よせいをい良なる科なる  
さ一けんをく一もんの若元をあり一り  
りあり  
十二 物のきりあつとよふ付く若あり  
をいしてきりあつちりよふあり

しりあき知らぬてよまめーしつうぢりあき  
十とねんぶよまにほまいしくわうま  
をねまめいらてあはけなくねーてまわ  
ふんひさんまーく物のもくまゆ  
ふくいんあとなま 良からあつむ又い  
糸をたゝはへー

十のさいをんさるま人の物ま我人の為  
まが良めとまらかりりあまわ

十のひやくあやうあと地どうよまあま  
あて町ねんく又いほまの人もあまわ

多人は海にありてはさるるをばあは  
 ちりよひの初めをさるるにあらはして  
 ひきかへしとてさるるにあらはして  
 よういへるはさるるにあらはして  
 さるるにあらはしてさるるにあらはして  
 さるるにあらはしてさるるにあらはして  
 さるるにあらはしてさるるにあらはして

十のちよひの初めをさるるにあらはして  
 の下をさるるにあらはしてさるるにあらはして  
 をわたくしとてさるるにあらはして  
 十のちよひの初めをさるるにあらはして

又なるうらぐあふとよむはちよけんたう  
まじしよまじりくくくくくくくくくくく  
そまじりくくくくくくくくくくくくく  
はとめさるくくくくくくくくくくくく  
あまらぬくくくくくくくくくくくく

すいやくくくくくくくくくくくくく  
あすはてうけとまま入らちくくくく  
よてまのくくくくくくくくくくくく  
まよまらりくくくくくくくくくくく  
こくまわくくくくくくくくくくく

主人の為よりいづくもいふるの事

牙ぬのまゝいんと

一帳屋よ人よがううううあや

二けんくらようううううううう

三ぶうううううううううううう

うううう

三巻人よちぶよくまきつけ又らめん

がくまううううううううううう

うううう

人よ申すたつひあやうううう

いんまふくこふらうのり

み地人のこはあつるり出来せんりりおれりい

かゝるきやよまのりいふらうりやま

六人はもあつるりおよこり或いし科は

合カールうらうりやそれとこもねたの

あうちとあふたくいのけ也

七地人はあんまふくませたのいよはく

申まつらうせうらうりあま

ハさーけんぞくの科ましましあうり

いあうらうりあーのりあうりあうり

九カためーは死人さまいふらんくろあや  
十女人よひまぢりせむ又らまぢりよけんま  
くひ或いにくれつまらへらんくろあや  
十一す人あらんまぢりーらんくろあや  
Pー  
十二向くつらむー十よまあらんくろ  
ろりあや  
十三あんいよいよらぢこぢりくあや  
がせんと黒いらんくろあや  
十四のまぢりんと

一かうあよくの科はいつぐさくろあま  
をきといつもたりひははまあまの科  
或は二スの成一人のちうあまおありちあせ  
科又またびての女ひあせんとしてまぶ  
まのまどいあまのあまあまあまあま  
あがんのぐらんあまあまあまあま  
Pあま  
二女人のくいはんせあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
二あまあまあまあまあまあま



ては...  
まうねん...  
うの...  
め...  
六...  
が...  
又...  
い...  
七...  
う...

め...  
六...  
が...  
又...  
い...  
七...  
う...

六...  
が...  
又...  
い...  
七...  
う...

が...  
又...  
い...  
七...  
う...

又...  
い...  
七...  
う...

い...  
七...  
う...

七...  
う...

う...

ハきんがのむよかさを人よしや  
又い持ておゆるりあや

九けいせまたてふるものあつを  
進退とまらぬのいさよ

ナあんによいよふぞんよこい  
たくのぞえ又そのぞえまどげんと

セーや  
やうあふんあつを又い

十一やうあふんあつを又い  
十一やうあふんあつを又い

ひよまほいほ様よまーらまよあせし  
十一二むむはらむむあまの女ん寝つまの  
まーらまよ何んぞまよたがんの科よ  
何やうくあせーや又まのかこよまこ  
そよ何ーうはべー

一 弟七のまぶめんと

一 何ぬ元物まねんさうさうりあうをそ  
久子ーーーま科のからさかんとまらとん  
へそ何よまらーあへかよげまをかへー  
わさぬゆかぬもろりき清いげんよぬり

貞一

二ころねあかりねよまゝとあまのただいよ  
やい海せつづいふらりあまや

とまやうをいよぬきをうまよーわこ  
くーあけはすあともはのひこまや

いりまのいの可き物よとよよくこま  
まかいうりのるよてぬえくまぬいり  
うりあまや

お物よかまよるねよまげまよまよま  
くらうりあまやけはま何ていこんへそあまよま



そと目録をいひてあまはまいていへばあまの科  
あまの又そをいひていへばあまの科  
うしどたとへを物まぬまゝにあらそをいひ  
かへていひていへばあまの科  
二人の科をかめらるるあまの科  
いひよとまよかむまよては人はあまの  
科をいひていへばあまの科  
と目録あまの科をいひては人の科  
あまの科をいひていへばあまの科  
あまの科をいひていへばあまの科

科をさぐる人よきうけんさくらのゆゑに  
あつたあつたて科はあつたあつた  
あまたとそよ付てまよひまよひ  
まよひまよひそよ付てまよひまよひ  
まよひまよひ

四巻人のまよひ科をさぐる人よきうけん  
さくらのゆゑにあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

有九才十のまよひ人と

一六をんのみまぶめんとはいわういん糸の  
何れをよてえあきたといふ他よとげ  
まごとのをこふりりや

二向くままぶめんとはいわういん糸の  
何れをよぬた里や何れをよぬた里とわ  
まへあうりそをよぬた里や  
こがよてまをよぬた里

三牙すをんのみまぶめんとはいわういん糸の  
七をんのみまぶめんとはいわういん糸の  
何れをよてえあきたといふ他よとげ



のぞきながらのあやむ

才六七のまはら科は付てあん

んーやまたとびつてき

才一まんののり

一徳人さいやーめらるのりあやむ

二もはら科はあらるのりまよまんーて

人は徳まらるのりあやむたとへをけるけ

若と里の連んとて人はありーらるのり

あとま徳かたぐひののり

こそまののりまよまんーてあやむのり

とてあふらでうはいいたる也

一 だとい言入り ~~出~~ 人よ言入と里  
きんどの心あて計よてせーるりあま也  
一 牙にぬここのり

一 かりーものごよよきりり 出来は向  
そねかあーたま也

二 向くあしり出来は向すよりびたま也  
牙とんよくのり

一 賊を求めんとしてとほろ科を給ー  
うろりあま也

二じいんのうろかつはゆまえてカミあつ  
合カサズマール

才西 ちうちよくのう

一物と合一色はよしてさむくーさ  
うりあつ

二ちあましくまはすかど調まのころう  
あま

三向く人まもあまなくろまはか  
調まをさうりあ

才文 だんまよのう

一けんをくわはひの地人は謝して保きて  
いふよあふーいさんよさんせんたあよ  
いさよあさんといふいふるるりあやし

才六けぶのり

一物何まの技ゆまあひいふはよのぶん  
あまや

二物うゆぶんよよて一馬ん積物を積ませ  
さあや

三けんをくのぶのぶだんいばつせあや  
よて下人子虎の勇持あさるりあやし

才七 吾後は同まかくはげさ

為たもつぐさ条々

きりりーさんとおは若くよくこんひさんま  
新良へるるまをやけうらまよよてくら  
又右まえいひーごとく二名科またら  
かへはま下さたよまとおあふりまあふ  
見へーこれ良あち日まよくちかくあま  
のま。○はあままうあーこよねちま  
まあが良あちさんちまーあちまんとて  
もあてまひらまよまひらまんとてあまの

へはさうあはし作のてうはさまれぬへと  
P. 511—それよるにたちあうまゝあうま  
ちやく—き日科よあつまよとくをよ  
きうけんとおふつ一の夜をさべ—あき  
はあちあきあきあきうううよんぬあごとく  
ぬうあまよあまひいよせ科をさあう  
あふへううごとの夜よあまよとくあち  
死まふとごいをさういをいんへは  
のくろりまよ 極建をまついおまげさ  
くははのもんまあへをあてあうすてふ



やうはびらうあよよささげをふこをん  
めの一へんよひひまつさんとよよをり  
じんへんのもくはしよまのりーぬい  
勇のぐらうやよるへぬへとれえをゆ  
べーかくのごとくぬーてよま又pのぐ  
べんいつよでうきをあてきと日ぬり  
ぬんべんかとのお物をぬぬはよささげをふ  
せびんぬーとのぬいづめつよ對ーぬい  
ぬと日一つの科をもぬささらうよ計ひ  
ぬいつよはでうぬいぬまよぬぬぬーと



と日一べきかとのふとをさすくさげ  
を家 清力の清にうめつは對一強ひて  
我と日あることわざをうざら様は親  
を海いつはでう花すいひまんと我念  
まよよま遠くさげを家せすま一との  
清にうめつは對一強ひて我と日 念は  
何れ強さく強ひうは清力をそ強へとり  
べしま性又び強せんまま強ひま強べ  
まま強ひま強ひま強ひま強ひま強ひ  
我名のまんとま強ひま強ひま強ひ

おかう びーかくのごとく びーびー  
いよでう びの びびびびん びびびび  
又 びよ びびびびびびびびびびびび  
びの びんとは びびびびびびびびびび  
びよ びよ びびびびびびびびびびびび  
びへ びよ びびびびびびびびびびびび  
びの びびびびびびびびびびびびびび  
○ びー びびびびびびびびびびびび  
あう びよ びびびびびびびびびびびび  
びと びびびびびびびびびびびびびび

ドーをわけてまよあうらまへーの所を  
 在業の夜をほとあつて、ねほねのは  
 あはよまひてらめんくのあほをねえー  
 だーーあひんくわんさひもち、あひと  
 ねはあうらまへれど、あまんけらー  
 もとあひまよあまもてほまうままひ  
 ねまよてらあひんあひんあひのあ  
 だまうらまへんあひんあひんあひ  
 ねまうらまへんあひんあひんあひ

あすちしよらうこをば何のせうぢよ  
あまぜずさやましとらんこくばすのよよ  
をひて世界をばけりよよよてくごぢう  
らいたいしをばけり科よゆふしけへ  
れえをば

か望すよらうこをば何のせうぢよ  
一切の人をばけりん為よくばすのよよ  
ありしよらまぜすさやましとのせうぢ  
ちよらうこをば

○諸河をばあまぢぢとのとてよよて

種が良べーたとへを為るべく良一の  
まじりをはとめん為よたーうよまきこ  
とをさつりごとくあふべー又何もの  
くはまはるいよまほくうりまよあべー

日お絶よまがほべるいり

やぶんの肉はても又おはても人はさん  
くさいー物結ませんけいのりよたー  
あじべー

一よら巻人の科よたといまことぬた  
けいさきべーしんがしりまをいあらしすま

さておきまうしあるはあつたたとへを  
人の敷をよねはしる科をふことく  
めんがくまうしあるはあつたたとへを  
たうとまあうしあるはあつたたとへを  
きうげんまくちあつたたとへを  
科はあつたたとへを  
どののほりあつたたとへを  
こはあつたたとへを  
うんとあつたたとへを  
あつたたとへを

あなごのあををほくら科也

いよばらんらんはあくらごまらぶらぶら

ぶらぶらまならかづうの残らまじまの

あはあのふらぶらぶらまじまのあは

まよまあこまあまらぶらぶらたとへをぶく

あくの入のあまらぶらぶらとと

又てうらまのあーのあまらぶらぶら

あまらぶらぶら

一せんまをあへてよままじまと合すまの

ためまあまらぶらぶらとくのかんまんの





所効力を以て至念切は天祐とも望いふと  
云天はあにちいげさるべし  
二箇をすこむべりうざゆるゆへいふんと  
すまひいふんをうり宣ふごとく偏は父  
このこあまかぶつゆへはそをもちぬすこむ  
若くは海父弟はわざらひあすもたとい  
あまのついでをすこむとくさけもかう  
あまのついでをすこむとくさけもかう  
すまひいふんをうり宣ふごとく偏は父  
若くは海父弟はわざらひあすもたとい  
あまのついでをすこむとくさけもかう  
あまのついでをすこむとくさけもかう  
すまひいふんをうり宣ふごとく偏は父

あふあふよよー

合枝のあふーよ

でうんどのぐらううまじいぞまーよあふー  
まーくもるまじいぞまはうへ死人のあふの  
けりくまはうまじいぞまはうへ死人のあふの  
まあてはあうまじいぞまーへん

代々よかよみてあんならまんどろうまあめ  
あひ方よりあひまよでうまじいぞまはうへ  
まあまら方のあふあんならまんどろうまあめ  
あーまあめあふん

○そりトてつねはあはれさうけとまぢら  
我々の用は何うあつりまじ下人みだ  
あまふ科まゝとて見をただねさぐつて  
いげんまゝくゝいさめまあはべー又まゝま  
持ふらんこゝろまゝは人は何トらんぞか  
やうはすべーそれさうよとまぢらま人の  
下人はいさよくなあつてまゝみだまゝ  
あゝそごつちのさあつてまぢらは何と  
さりまゝまゝさうけあつてさうけでうま  
そごつちのさあつてまぢらは何とまぢら

呼のぬれしをよそ一ぬいてさんとうり  
又母としてみ次のとよふくろつけぎまん  
まいて下人のとよふいざんむねばらまど  
むしよばくろくまうとのむいふうをよせん  
ちよよよとよまたと宣やせ  
○おちあつらひんかぢんかん一とん一の  
さうめ、おすべーとよすあらちめやまよ  
ともあやせ

一ま目の清慧の清れいよかくのごとく  
おすべーというは清まるとは我よくべけれ

くらがぶこのは舞のは舞ふよしとてんで  
よきは  
二まはは舞—くら種まこ—はやうよ  
か—ささるへ舞へと舞こきは—  
こま日中のんことごとくは他はあはあり  
はかぞとたすべ—手ははいんさくらあ  
ほいかとまらる人なれもいぶするり合  
かとおふべ—  
かかくのごとく舞—てよま種ありと  
おもいぶさをすあらちこうくふいこ—

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

ー

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき  
おとよのうたよきおとよのうたよき

ひくさんせんさくあまてふま  
はつらうしんせいのほゆるま  
もてせんまひろく若也



十のさやうのうちよをあらはどのよ  
あまはけはうらすあまあまを又やす  
くたはねはうあめんかこめよりうどの  
こいよあまがひあまあつめまどのう  
よここまはくはあまいとたびは  
よこけうまうあまはうゆへまか  
うまどのうあまのうまこはせこげぬ  
はあまよあまはあまはあまはあまは  
とまはあまは



一〇 飯 ぎ

善 徳 せ ん だ

於 此 あり ところ

美 実 美 人

は づ ぶ

ゆ づ

生 づ

こ ぞ う

た め

こ ぞ

山 あり

為 や ま い

科 と か

ま ね そ の

の ち

二 密 ち ざ い

ち ち

一 切 ち ざ い

人 ち ざ い

に ち ざ い

時 も つ とも

て も つ とも

あ ち ところ

ゆ づ

ち ち ざ い

牙 一 ち ざ い

ち ち ざ い

は ち ざ い

二〇 ち ざ い

ち ち ざ い

人 にも

げん

多 たら

位 くら

下 くら

下 くら

くら

或 くら

くら

力 くら

た まい

宣 くの

ま いく

強 あ いく

ゆ べ の ん ぶ ち

世 男 せ かい

天 て ん

我 亦 わ ぎ

同 生 だ せい

あ べ ー

あ ぎ せい ん

三 の ん せい ん

娘 た まい

天 祐 て ん ぐ

あ ぎ せい へ

あ ぎ せい へ

本 まい

力 せい

本 切 た せい

神 た せい

四〇 新いこと  
 故ゆへに  
 何あつて  
 持もち  
 斗うへ  
 名さう  
 代ばい  
 奉せ  
 ろん  
 地もの

五〇 念い  
 出入あつ  
 必かまらず  
 せ後ごんご  
 進退あんばい  
 むあゆ  
 糸てうく  
 おまへ  
 出いで

六〇 若もの  
 約まじ  
 知ち  
 身人あつて  
 用要かん  
 ぶあつて  
 肉うち  
 比はぎ

又

まも

色

すぎ

月日つぎい

板

かぎ

石

あい

糸目ふいもく

出良いふ良

下いげ

係ありき

里おもい

は

かの

對

たい

杖持

あち

き

かう

七〇何あよ

義かうじほ

卵かう

いそたいま

運たつ

何

いげ

ぬ穴あつとも

仁つりまはほ

成徳あせう

お文もん

おぞんずほ

心ゆあるへ

唱とあへ

心地あち

地た

的 あらう  
及 まよぶ  
九〇六 おろ  
少なき  
多ふ たまふ  
何 とも  
初 はじめ  
之科 たいご  
を じ  
或 あらう

退 あらう  
十〇町 かあ  
借 大さき  
換 さげ  
あ化 けうけ  
藝 ぎ  
約 作ぎ  
十二〇 ぐち  
たい

不化 あらう  
七日 あらう  
何 あらう  
合物 あらう  
実子 ぶつ  
教 うや  
申 あり  
十三〇 入い

ろげぶう里

字阿はんご

ゆあんどち

未いほぶ

様やう

作ぶい

十三〇ちかき

斗むう里

年孫ん

月げ

何つあて

十五〇そびし里

十文目

十もんめ

若たやとい

流りあこあ

又母ぶこ

十五〇かたひ

宝たうり

金阿さるは

法さう

心申あん

ぢう

可れとこい

十六〇知あは

伝あんと

十五〇あひ

えんあしとこ

勇とあん

十五〇あう

あゝりあく

ト

出来あつた

万をん

か括りやう

十九の父いり

者いのち

あづりて

と合あま

あゝい

女おんあ

ほあさがい

女子いよ

あせん

あひいづう

あゝあゝい

あゝりくト

二十の地ら

あゝあゝ

あゝあゝ

二十のあゝこと

あゝことく

二十のあゝこと

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

二十のあゝ

あゝあゝ

二十のあゝ

あゝあゝ

諸かたは

三六〇あは

三六〇あは

き

三六〇あは

きん

三六〇あは

三六〇あは

三六〇あは

三六〇あは

賊宝さ

かう

三二〇徳じん

三二〇徳じん

三二〇徳じん

三二〇徳じん

もん

三二〇徳じん

三二〇徳じん

三二〇徳じん

と日こん

まち

三二四〇母

三二四〇母

三二四〇母

三二四〇母

三二四〇母

三二四〇母

三二四〇母

三二四〇母



内 うち

卯 卯 うち

三三六〇卯 卯

三三六〇卯 卯

三三七〇卯 卯

三三七〇卯 卯

父 父

三三三〇父 父

三三六〇父 父

三三六〇父 父

代 代

三三六〇代 代

万 万

三三九〇万 万

三三九〇万 万

三三九〇万 万

四〇 四〇

三三九〇四〇 四〇



○まうあのかいし

○まうあのかいし  
あはばーあはばー

○あとのそんたいちさよそあはばー

あはばーあはばー

○あはばー 人るのちあいのちのあはばー

たいしそあはばーあはばーあはばー

○あはばーあはばーあはばーあはばー

あはばーあはばー

○あはばーあはばーあはばーあはばー

あはばーあはばー

○いづれもてうすのほねをぬことよ  
うけをさうりせ

○あせほづうてをわてまのりせ

○あんへさうばあんにんまをさうり

えてまのりせ

○あんどよえくのりせ

○あうりめんとあさげのりせ

あ接いせあや

○あゆりり科あはぬまのりせ

○あよちとすわじのりせ

○へまあはなう  
かりき科のうら

○へまてんーや  
あんにんのかうりあん

とのうらこ又まやうだらのうらまこ

○いこ又あんにんのかすもてねんけ

○だもあ科まぐらものうらまもていぢぢ

○ぢぢうらうらま  
げんぢまてまぐら

○まてんはあまもてまてはけくぢー

○まのうらり

○すいあうらぢ  
目まかこらうら又ね

○まあはなうら

○ ぬらめんとす 清あふトでうす又  
○ せげまトト じよるさげけりよ清かすての  
糸あま

○ おりまトト じよるさげけりよ清かすての  
又まじりまじりてしるまじりまじり  
○ だんの竹道あるはりまじりまじり  
○ 登れと日 いひえちいなるは日  
○ くさすまの 年申は一なるまじりまじり  
まじりだの 為と一してあけまじり  
よまじりまじりまじりまじり

○おすまゝに候うしうでうすのあはげま  
もてかゝ思ひうかそひうもんじ

○どのいぞ世男のまゝまよ入るの言あま  
○たゞしうまよし

○まゝをたまよあて普人のけくま  
○まゝあまあま

○まゝのくたまよあて普人のくか  
○まゝうくあま

○まゝあまあまのまゝあまのたまよ  
○まゝあまあまのくたまよあまの

うりや

○かます

あこゝろのまはをこあいよつういふ

まきありのけのうけもの也

○かろさ

でういよまあはぬまあへ

下さへあ合カ又いあはぬま下うすの

あゆはあひつすは吾徳のうり也い吾

徳いでういよまあへ下さへ也

○ごらんご

七日の日ねの初日をもち

○ゆふいじ

○かくんぶ

一日



○てふる

二日

○くさる

三日

○さる

四日

○たまる

六日

○たむ

七日



八日

1  
Joan



let o

780852

RARIORA.

V. oct.  
852

Rariora

Handwritten vertical text on the left edge, possibly a library or collection identifier.



OCN 1285498612

Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, arranged in vertical columns. The text is written on aged, yellowish paper with a large brown rectangular patch at the top. The characters are densely packed and difficult to decipher due to the cursive style and fading. The text appears to be organized into several columns, possibly representing a list or a series of entries. The characters are written in dark ink, and the overall appearance is that of an old, handwritten document.

**Rariora**

**V. oct.  
852**